

また、血流異常は腎の形態的機能的変化が著しい症例で高率に認められたが、腎形態的機能的変化陰性群でもかなりの割合で認められた。

次に、Obstructive Uropathy の確定診断につき検討すると、Diuretic Study を併用した検索が最も成績が良好であったが、腎盂腎杯系の異常に血流変化を伴った場合でも Obstructive Uropathy に対する specificity が向上した。

以上、Obstructive Uropathy における腎 RI-angiography は、直接確定診断に結びつかないものの、腎血流変化という一つの機能的変化を評価する手段として有効と思われた。

35. ECT による腎動態機能検査

竹田 寛 服部 孝雄 瀬口みち子
前田 寿登 中川 毅 田口 光雄
(三重大・放)
北野外紀雄 (同・中放)

ガンマカメラ対向型 ECT 装置(東芝製 GCA-70A-S)を用い、 $^{99m}\text{Tc-DTPA}$ による経時的腎 ECT 像を作成、その臨床的有用性を検討した。方法は、 $^{99m}\text{Tc-DTPA}$ 10 mCi を急性静注直後より、対向ガンマカメラを 30 秒間で 180 度連続回転させ、60 方向からのデータを収集し、その連続的な反復により、30 秒ごとの ECT 像を、計 15~18 分間にわたり求めた。

画像再構成には convolution 法を用い、スライス幅 5.4 mm で、体軸横断、冠状断、矢状断層像を作成した。また、各画素ごとに time-activity curve を求め、それより T_{max} , $T_{1/2max}$ の値をパラメーターとして、任意の深さの冠状断層像における functional image を作成した。

正常例における経時的冠状断層像にて、腎皮質の RI 集積は 2~3 分で最高となり、以後徐々に髄質、腎杯、腎盂へと移行して行くのがみられた。また、その functional image では、 T_{max} は、皮質では 2~3 分を、腎盂領域では、3~4 分を示すのに対し、 $T_{1/2max}$ は、皮質では 5~7 分を示すが、腎盂では、逆に短縮傾向がみられた。腎実質性障害例では、皮質への RI 集積の遅延がみられ、閉塞性尿路疾患では、腎杯、腎盂での RI 貯留が、それぞれ conventional image よりも明瞭に示された。本法は、腎皮質固有の RI 動態を、他臓器や隣接

する腎杯、腎盂と重ならず、Back ground の影響も受けず認知することができ、臨床的に有用な検査法と思われる。

36. 悪性腫瘍におけるリンパ節シンチグラフィーの役割

中嶋 憲一 立野 育郎 松本恵美子
(国立金沢病院・放)
松田 博史 (金大・核)

リンパ節シンチグラフィーは簡便にできる利点はあるが、その有用性についての議論もある。そこで 1981 年、国立金沢病院にてリンパ節シンチグラフィーを施行した 43 例について検討を加えた。放射性医薬品としては $^{99m}\text{Tc-rhenium colloid}$ を用いて 2~3 時間後に撮像し、リンパ流の評価には更に早期のデータも記録した。コロイド注入部位は足背、子宮腔部、手背、頭部、肋弓下(傍胸骨領域)の順であった。依頼の動機・目的をみるとほとんどが悪性腫瘍の転移の有無の検討のためで、骨盤内・傍大動脈領域が多く、腋窩、鎖骨上窩、鼠径部など表在リンパ節の依頼はなかった。これは容易に触知でき、生検可能なためと考えられる。婦人科領域で子宮腔部より注入し、手術によりリンパ節転移の有無を確認できた 10 例について検討したところ、正診率は 5/10 (50%) であり、手術所見との対応の困難性、注入局所の状態、技術的問題などが影響すると考えられた。以上の検討からリンパ節シンチグラフィーの意義として (1) リンパ浮腫の評価、(2) ^{67}Ga など他のリンパ節描画法と相補的役割を果たす場合がある、(3) 骨盤内、傍胸骨領域など他の方法で判定が難しい部位については更に検討が期待される。

37. 食道リンパ節シンチグラフィー

——その有用性と限界——

亀井 哲也 瀬戸 光 二谷 立介
古本 尚文 日原 敏彦 石崎 良夫
羽田 陸朗 柿下 正雄 (富山医薬大・放)
坂本 隆 斎藤 寿一 藤巻 雅夫
(同・二外)

食道癌のリンパ節転移の診断を目的として、食道リンパ節シンチグラフィーを行った。

方法： ^{99m}Tc レニウムコロイドを内視鏡下に食道粘